

ママからの質問

無痛分娩について教えてください。



●お答えいただいた先生
おとぎの森レディースクリニック院長
古谷 博先生
平成3年、愛知医科大学卒業。
蒲郡市民病院、金沢赤十字病院、富山市民病院等に勤務のち平成23年4月、現レディースクリニックを継承、開院。
医学博士。日本産科婦人科学会認定医、母体保護法指定医。

無痛分娩ってどんなの？

近年、お産への不安や痛みへの怖さからか、無痛分娩（硬膜外麻酔）を選択する産婦さんが増えてきています。薬物を用いない産痛緩和法（精神サポート等）で十分な効果を得て出産できれば最善でしょう。しかし、産痛に対する恐怖心や胎児の大きさや向き、骨盤の形など分娩中に強い痛みを訴え薬物による産痛緩和を求める産婦さんがいるのも事実です。それに対して児に影響なく痛みだけを取り除きたいと工夫改良されてきたのが、現在主流の硬膜外麻酔を用いた無痛分娩法です。

硬膜外無痛分娩を行っているからといって産婦さんはお産で楽をしようとしているわけではなく、しっかりと努責（いきみ）がないと出産できないことには変わりありません。すべての痛みを完全に取り除くのではなく、ピーク時のつらい痛みを取り除くことでお産に対する不安感が軽減され、リラックスしてお産に臨むことができるようになります。

方法は？

無痛分娩法は薬物の種類と投与経路により分類されます。鎮痛剤の筋肉・静脈内投与、麻酔

ガスの吸入は脳で痛みを感じなくさせる方法です。硬膜外麻酔法は背部から細いカテーテルを硬膜外腔に挿入し局所麻酔薬を注入することにより子宮、会陰からの痛みが脳に伝わるのを脊髄レベルで遮断する方法です。

当院では、硬膜外無痛分娩をされる方はまず、麻酔による低血圧を予防するため、点滴をします。台の上で横になり、背中を丸くし、硬膜外腔にカテーテルを挿入し固定します。陣痛が開始し子宮口が4〜5cm開いた頃から局所麻酔薬を開始します。入院時より絶食となり、ベッド上で努責（いきみ）が出るまで横向きで過ごします。定期的に、血圧測定、分娩監視装置による胎児モニタリングを行いLDRでリラックスします。また、家族の立会いも可能です。

どういう人が適しているの？

通常の方法で産痛を緩和できずさらに効果的な鎮痛を求めた場合、不安神経症や過換気発作などお産の痛みに対する恐怖心が強い場合、疲労による分娩遅延、軟産道強靱の場合、妊娠高血圧症候群などに適していると思われれます。しかし、腰に麻酔をするときには体を丸められない人

には向きません。また、局所麻酔薬にアレルギーがある人、出血傾向がある人、極度の脱水症状を認める人、全身または針を刺す部分（背中、腰）に感染徴候がある人、心臓疾患や脊椎の病気がある人は適していません。

メリットは？

次のようなメリットがあげられます。

- 全身投与より鎮痛効果が強く確実
- 母体意識が保てるため誤嚥の危険性がなく、出産の記憶が保たれる（赤ちゃんの産声を聞くことが可能）
- 交感神経遮断により痛みによる血圧上昇や頻脈を回避できる
- 痛みが和らぐと筋肉や産道の緊張がほぐれてお産がスムーズに進む
- リラックスができ分娩時間を短縮することが可能なため、体力を温存し分娩後の回復が早い
- 胎児への影響を認めない。帝王切開が必要になった場合、同じ麻酔方法で行える

デメリットは？

デメリットとしては次のようなことがあげられます。

- 手技の熟練を要す

- 麻酔に起因する合併症（低血圧、頭痛、背部痛、悪心、掻痒、痙攣、血腫、膿瘍、感染、アレルギー）の可能性、分娩経過に及ぼす影響（陣痛促進剤使用頻度、鉗子・吸引分娩率が上昇、分娩所要時間の延長）がみられることがある

産婦さんと助産師が信頼関係を築き上げ納得のいくお産ができるのが一番よいと思います。ただ、お産に対するイメージ、痛みに対する不安は個人差があります。どうしても痛みに対する不安をぬぐえない産婦さん、痛みが嫌だからお産は嫌だと思っている女性の方には硬膜外麻酔無痛分娩という方法があるということを知って安心してほしいです。当クリニックではお産の途中でも状態によって硬膜外麻酔無痛分娩に切り替えることも可能です。お気軽にご相談ください。

